

# 福澤研究センター通信

Newsletter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

第42号 2025年4月30日 発行

## 目次

*三田演説館150周年と弁論部の未来（高久晃宇）…… 2	*新収資料紹介…………… 9
*慶應義塾辯論部（井川誠之）…………… 3	*主な動き…………… 10
*三田演説会資料の歴史的意義（倉持隆）…………… 4・5	*センター諸記録（2024年10月～2025年3月）…… 11
*演説館の保存修理（渡辺浩史）…………… 6～8	*スタッフ一覧…………… 12
*「コロナ禍」におけるウェーランド経済書 講述記念講演会（高野泰彦）…………… 8	



## 三田演説館開館150年

三田演説館が開館したのは明治8年(1875)5月1日のことであった。150年前のこの日、三田の慶應義塾の表門から入り、丘の上に出てすぐ正面に、そのなまこ壁の特徴的な建物が完成して一般に開放された。そして壇上には、前年から「演説」「討論」の練習を重ねていた小幡篤次郎、朝吹英二はじめ10名の福澤門下生と福沢が次々に上がり、開館の祝詞を披露した。この三田演説館を源にして、「演説」という文化は日本中に広まり、今日に至っている。しかし、福沢のいう演説は日本に定着したのだろうか。本を読むだけが学問ではなく、人と語り合うこともまた学問なのだ、それが演説だという福沢が語る演説は、今日の「演説」の感覚よりもかなり広い。語り合い知識を交換し合うことが精神を高め、それが自由を担保し、文明の発達を促すという福沢の意図したところの「演説」の普及は、日本に未だほど遠いように思われる。150年の節目に、改めて「演説」の創始に際して意図されたことを見つめ直すことは有意義であろう。

(都倉)



三田演説館を単独で写した古写真は案外、数が少ない。これらは明治年間に撮影されたと推定される外観と内観である。





## 三田演説館 150 周年と弁論部の未来

慶應義塾大学弁論部三田会（エルゴー会） 高久晃宇  
2025年連合三田会大会受付部会副会長

三田演説館は、単なる歴史的建造物ではない。それは、日本の近代化とともに歩み、言葉を通じて社会を動かしてきた「弁論の聖地」である。1874年（明治7年）、福沢諭吉がこの場に「三田演説会」を創立し、言論活動を推奨したことがその始まりであった。そして、その志を受け継ぎ、福沢の愛弟子である尾崎行雄が1876年（明治9年）に「協議社」を創立し、犬養毅の「猶興社」、「自由社」、「雄弁会」、「蘇張会」等の塾内弁論団体が生まれ、これらが弁論部の前身となった。その後集合離散の過程を経て1907年（明治41年）10月15日に現在の「弁論部」が結成された。

戦前、三田演説館は弁論部の部室として活用されていたようだ。しかし、戦後の時代の変遷とともに弁論部の拠点は移り、1990年代には、三田演説館は改装前の状態で利用が難しくなっていた。年に一回程度換気のためのお手伝いで入館した際に、床材がギシギシと鳴っておそるおそる館内を歩いた記憶が残っている。

その後改装が完了し、現在では弁論部現役生が主催する「福沢杯弁論大会」や、弁論部三田会（エルゴー会）の総会の会場として三田演説館が活用されている。これは単なる歴史の継承ではなく、三田演説館が現役生の「発信の場」として今も生き続けていることを意味している。

弁論部の歴史を振り返れば、この場で語られた言葉が時代を動かしてきたことがわかる。明治時代には、福沢が目指した「弁論術の普及と啓蒙」に力が注がれ、大正時代には現役国務大臣を招いての「擬国会」が開催され、政策討論が行われた。戦後の言論統制が解かれると、1946年（昭和21年）に「弁論部復活宣言」がなされた。

そして、1975年（昭和50年）6月28日（土）、三田演説館開館百周年記念弁論大会が開催された。この大会は、義塾当局のサポートを受けて当時の弁論部現役生と弁論部三田会が主催した。当日は現役生とOB合計13名の弁士が登壇し、その後国会議員や市長・区長となるなど政財界・法曹界などで活躍した。また、大会の様子は読売新聞・朝日新聞・毎日新聞などに取り上げられ、フジテレビの昼のニュースでも報道され、広く世間の注目を集めた。この大会を通じて、弁論という文化が現代社会においても重要であることが再認識され、三田演説館と弁論部の存在意義が改めて示されたのである。

このように、1874年の三田演説会創立、1875年の三田演説館開館、1876年の弁論部創立後、三田演説館と弁論部は共に歩んできた。

現在、三田演説館は教授や来賓の記念講演や式典の場としても活用されている。そして、私はそれに加え、この場が塾生と塾員にとって「未来について語る発信源」であり続けるべきだと考えている。私自身、言葉が持つ影響力を実感してきた。20代では東京六大学弁論大会で優勝し、30代ではプルデンシャル生命保険で世界23,000人の営業成績トップとなり、初代世界チャンピオンとして2,000名の前でスピーチを行った。さらに40代では、2019年にマイアミで開催されたMDRT世界大会（全世界の保険・金融営業パーソンのトップ2%が集う世界最大の研修プログラム）で、日本人として初めて1万人の聴衆を前にメインプラットフォームスピーカーとして登壇した。これらの経験を振り返ると、私の「伝える力」は、すべて弁論部での経験、そして三田演説館の精神から培われたものだったと確信している。

情報があふれ、AIが言葉を生み出す時代だからこそ、「誰が語るのか」「どう語るのか」がより問われるようになっていく。SNSでは瞬時に情報が拡散されるが、その中で本当に価値のある言葉を見極め、発信することができる人は決して多くない。だからこそ、弁論部が培ってきた論理的思考力、説得力、そして人々の心を動かす力は、これからの社会においてますます重要になる。

私は、慶應義塾大学弁論部OBとして、そして三田演説館の精神を受け継ぐ者として、この歴史ある演説館が、未来を見据えた言論の発信源としてさらに発展し続けることを心から願っている。福沢諭吉が創立した「三田演説会」の精神を胸に、次の創立200年に向けて、言葉の力で社会をより良いものへと導いていくことを誓いたい。





## 慶應義塾辯論部

～150年あまりの歴史と我々に託された使命～

慶應義塾辯論部演練幹事  
総合政策学部2年

井川 誠之

我が慶應義塾弁論部は150年あまりもの間、様々な政治的、社会的問題を取り扱いながら、多様な歴史の変遷を遂げていった。「三田演説会」の名で福沢先生を中心に設立された我が部は、設立当初は「日本国の真の独立を企図した近代文明の導入のための国民精神の啓蒙」という目的の下に独自の発展を遂げた。その過程で、塾生による様々な弁論活動も活発になり、塾生達は塾内に様々な弁論団体を創り上げた。結果的にはそれぞれが離合集散し、現在に通ずる弁論部になったのである。慶應義塾、もとい慶應義塾弁論部が日本の言論界に大きな影響を与えたであろうことは言うまでもないだろう。

設立当初、三田演説会に始まる慶應義塾弁論部は、先述したとおり、塾内の各弁論団体の離合集散によって成立した。代表的なものには、協議社と猶興社というものがある。前者は、国会や言論界、そして経済界から政界に至るまで様々な場に先導的実業家を送り込む名目で結成された。憲政の神様と呼ばれた尾崎行雄や三井銀行理事の波多野承五郎など名だたる面々が輩出された。そして後者は、内閣総理大臣となった犬養毅が輩出された。このように、我々慶應弁論部は歴史上、言論界のみならず、政財界に多数の人材を輩出してきたことが分かる。

慶應義塾弁論部は、弁論、討論会、遊説、そして独自の研究活動などその活動は大変多岐にわたるものであった。全国学生新人弁論大会はもちろん、東京六大学弁論大会や慶早新人雄弁大会など数多くの権威ある大会に出場し、数多くの入賞を獲得してきた。そして、弁論のみならず、定期的に東京大学や防衛大学校などと合同で討論会を開催し、有識者を招き、その当時の政治課題に関して、活発な議論を行ってきた。そして、弁論部員のみならず慶應義塾の教授も招き入れながら、全国各地に赴き、各地の会場で一般聴衆を前に、演説活動を行ってきたのである。また、三田祭や秋祭においては、弁論部員が独自で調査したテーマに関する公開プレゼンテーションを行い様々な社会的課題に関する活発な議論が行われた。弁論部で培った能力を生かし、弁論大会や討論会などに限らず、より広い視野を持ち、一般大衆にも雄弁にその声を届けた。これらの活動は、どの大学の弁論部にも引けを取らないほど活発で積極的なものであったと言える。

我々弁論部は日常的に、定期的で開催される数多くの弁論大会での優勝を目指し、弁論や演説の練習を行ってきた。聴衆からの野次に屈しないように、徹底的な理詰めや発声練習をはじめとする、所謂「演練」を日常的に行ってきた。また、ディベートにおいても各論題に関する

研究を深め、学祭や各大会において活発に弁舌を振るってきた。そして、他大学との合同合宿なども行われ、広い交流関係を促進することも可能になったのだ。

このように、慶應義塾弁論部は150年近くもの非常に長い歴史を有し、言論界、そして政財界など様々な場に於いてその使命を果たしてきた。そして、社会の変化に合わせ、多様な活動を行い、弁論大会のみに活動を完結させるのではなく、一般大衆を巻き込み公の場で演説活動を行ったことも特筆に値するのではないだろうか。

しかしながら、その一方で現在、弁論、もとい演説の文化は全国的に衰退しつつある。かつて近畿大学や筑波大学など数多くの大学に弁論部が存在し、各大学が独自の弁論大会を主催していたが、現在ではその規模も知名度も縮小してしまったのである。そして、弁論部やそれに準ずる団体も減少し、弁論という文化が現在ではほぼ関東地方にしか残っていないのである。弊部も深刻な部員不足に悩まされており、行く末が見えない状況になっている。このような状況を鑑みると、弁論はもはやただのオールドメディアに過ぎないのかもしれない。しかし、弁論、そして討論などといった活動は、言論という形で自己の主張を体系化し、様々な修辞技法を用いることで、他者を説得するのみならず、自己の主張を明確化し、人格を洗練し、そして社会を変革せんとする実践的活動である。弊部はむしろ弁論とは、世界中で人種、民族や国家間の対立が加速していく現在だからこそ、必要とされるものであると考えている。だからこそ、弁論という文化が衰退を迎えている昨今に於いても、日本における弁論の発祥団体として、日本の言論界の一層の発展と人々の社会意識の涵養に一層の貢献をしていく所存である。



東京農業大学長杯全日本農林水産学生弁論大会にて弁論を行う湯野澤弁士  
結果、特別賞農友会講演部部長賞を獲得  
撮影日（2023年12月3日）



## 三田演説会資料の歴史的意義

慶應義塾大学三田メディアセンター課長 倉持 隆  
(選書・スペシャルコレクション担当)

2025年は三田演説館開館150年にあたる。開館に先立つこと1年前、明治7年(1874)6月に発足したのが三田演説会である。三田演説会は、自分の意思や考えを多数の相手に同時に伝える手段として、演説や討論という方法を日本に紹介した福沢諭吉と初期の慶應義塾の人々が、その実践と発展のためにつくった組織であった。三田演説館は、その演説、討論を実際に行うための会堂として明治8年5月に開館した。

三田演説会は、発会当初は厳格な会員制度をとっていたが、定期的に例会(三田演説会)を開催し、演説館開館以降は一般にも公開されるようになった。昭和42年(1967)、三田演説館は国の重要文化財に指定されたが、これは福沢諭吉によって三田演説会のための会堂として建設され、東京都内に残る数少ない明治初頭の洋風建築として貴重であり、歴史的な意義も深い、という点を評価されたものである。その歴史的意義をより一層深めているのが、本稿で紹介する三田演説会に関する資料といえよう。

三田演説会の様子を伝える資料はどのようなものが残されているか、本稿では慶應義塾図書館(三田メディアセンター)(以下、図書館)で所蔵する資料を中心に紹介したい。現在、慶應義塾で所蔵している三田演説会に関する資料をまとめたものが下記の【表1】である。1点(No.11)のみ福沢研究センターで保管されているが、その他の10点は「福沢関係文書」として図書館において保管されてきた。図書館所蔵の「福沢関係文書」は、福沢

諭吉の自筆原稿、墨蹟、書簡、遺品、旧蔵書など約600点に及ぶコレクションである。



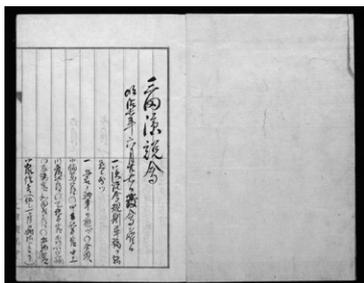
慶應義塾図書館所蔵の三田演説会資料

これらの三田演説会に関する資料については、松崎欣一編集・解説『三田演説会資料』(慶應義塾福沢研究センター資料4)(慶應義塾福沢研究センター、1991年初版、2003年改訂版)において主要な資料の翻刻が掲載され、詳しい解説が付されている。本稿ではその内容を参考としながら、各資料を概観していくこととしたい。

三田演説会に関する資料の中心となるのは「三田演説日記」第一号、第二号、「三田演説会誌」第三号、「三田演説会記録」第四号の4冊の資料である(No.1~4)。これらは初期の会務記録といえる性格の資料で、明治7年6月27日の演説会発会から明治33年1月27日の第402会までの演説会の具体的な様子を伝えている。なお、演説会の回数は、発会から第418会までは「会」、第419回以降は「回」と記される(資料No.8, 9の記載より)。

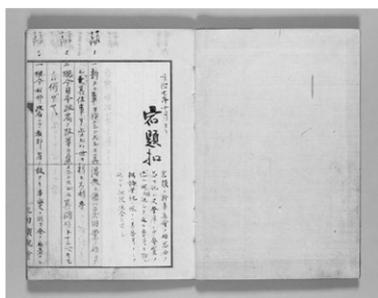
表1 慶應義塾において所蔵している三田演説会資料

No.	標題	自	至	法量 (縦×横 cm)	頁数	福沢関係文書 通番	備考
1	三田演説日記 第一号	明治7年6月27日(発会)	明治8年7月17日(55回)	23.7×16.7	1冊	454-1	第1~4号の4冊で納入。
2	三田演説日記 第二号	明治8年8月29日(番外)	明治14年5月28日(170回)	23.7×15.8	1冊	454-2	
3	三田演説会誌 第三号	明治14年6月25日(171会)	明治25年6月11日(317回)	23.7×16.0	1冊	454-3	
4	三田演説会記録 第四号	明治25年10月8日(318回)	明治33年1月27日(402回)	23.8×15.9	1冊	454-4	
5	宿題扣	明治7年10月	明治11年1月12日 (記事無し)	23.7×16.6	1冊	291	討論の論題集。福沢諭吉自筆。末尾に鎌田栄吉の鉛筆書きあり。
6	記事課弁論控 第一号	明治8年7月1日(第2会)	明治8年8月15日(第9会)	23.7×16.6	1冊	455	納入。
7	議事演習会記録 二	明治13年7月17日 (冒頭に前冊続きあり)	明治14年3月6日	23.7×15.6	1冊	456	一は欠。納入。
8	三田演説会記録 第壹号 (明治33年3月謄写)	明治7年6月27日(発会)	明治14年10月22日(178会)	23.1×15.8	1冊	290-1	写本。「宿題扣」「記事課弁論控」及び「三田演説日記」第一号、第二号、第三号(明治14年10月22日まで)を筆写。
9	三田演説会記録 第貳号 (明治33年3月謄写)	明治14年11月18日(179会)	明治39年6月2日(442回)	23.2×15.8	1冊	290-2	写本。「三田演説日記」第三号(明治14年11月18日以後)、第四号(明治33年1月27日のみ欠)を筆写したものに加え、新たな記録(明治33年1月27日~39年6月2日)を書き継いでいる。
10	三田演説会記事録	明治39年6月30日(443回)	大正7年2月22日(519回)	23.5×16.2	1冊	458	
11	三田演説会記事録	大正7年5月20日(520回)	昭和13年11月11日(575回)	23.5×15.8	1冊	K04852	福沢研究センター所蔵(左記は福沢研究センター所蔵番号)



No. 1「三田演説日記」第一号 冒頭

続いて、「宿題扣(控)」(No.5)は、与えられた課題について賛否の討論を行った弁論会でとりあげるべきテーマや討論課題をまとめた覚書で、その筆跡から福沢諭吉の自筆であると推定され、『福沢諭吉全集』第20巻にも収録されている。本資料では全48項目のうち、実際に取り上げられたテーマには頭注として日付や「済」の文字が記されており、福沢自身による記録である点と合わせて、三田演説会の準備過程を具体的に伝える資料として興味深い。「記事課弁論控」(No.6)は第2会演説会(明治7年7月1日)から第9会演説会(同8月15日)までの弁論会および雑会(自分の考えを自由に述べる、あるいは自著もしくは歴史書を解説し、参加者の批評を受ける形式の会)に参加した者の発言要旨を記録したものであるが、現存するのはこの1冊のみである。



No.5「宿題扣」冒頭(欄外上に日付と「済」の文字がある。)

「議事演習会記録」二(No.7)は明治13年3月6日に最初の会合が開かれた議事演習会(会議講習会)に関する記録で、こちらも残存するのはこの1冊のみである。議事演習会は三田演説会とは別の組織として運営され、その後消滅した組織のようであるが、初期三田演説会においては、演説会のみならず討論会がたびたび開催されたことが指摘されており、松崎欣一氏は三田演説会に関連する資料として見直すべき資料と位置づけられている。

「三田演説会記録」第壹号(No.8)、第貳号(No.9)はいずれも明治33年3月に作成された謄写本で、第壹号は「宿題扣」「記事課弁論扣」および「三田演説日記」第一号、第二号、第三号(明治14年10月22日まで)を、第貳号は「三田演説日記」第三号(明治11月18日以後)、第四号(明治33年1月27日のみ欠)に加え、新たな記録(明治33年1月27日～39年6月2日)を書き継いだもの

である。謄写本として作成されたこの2冊は、三田演説会関係者が、明治33年頃に至り、発会以来の三田演説会の歴史を振り返るとともに、その記録の重要性を認識していたことをうかがわせる資料といえるであろう。

最後に、「三田演説記事録」(No.10)は、明治39年6月30日以降、大正7年(1918)2月22日に至るまでの演説会の日時、講演者、テーマを簡潔に記録したものである。福沢研究センター所蔵の「三田演説記事録」(No.11)はその後を受け、昭和13年(1938)11月11日まで書き継がれている。三田演説会は、福沢が没する明治34年2月までに約400回開催されたが、これらの資料を見ると、福沢没後も継続的に記録が残されていたことがわかる。記録の中で、演説者としての福沢の表記は基本的に「福沢諭吉」「福沢諭吉君」となっているが、明治16年頃からは、「福沢先生」「(福沢)先生」という表記も見られるようになり、記録者の福沢に対する心情がうかがえて興味深い。



No.10「三田演説記事録」冒頭

慶應義塾では、以上のような初期の三田演説会の伝統を受け継ぎ、日本最初の演説会堂である三田演説館において、現在でも毎年三田演説会を開催している。直近では2024年12月、塾員で作家・国文学者である林望氏が「幕末薩摩の若者たちと私—薩摩スチューデントを追って—」のテーマで講演され、この講演会が第713回とされている。ただ、現在までの演説会すべての内容を網羅する記録は残されていない。特に昭和18年12月から休刊した「三田評論」が昭和26年10月に復刊するまでの戦中戦後の開催情報は、把握できていないのが実情である。今後は、戦後も含めて事務部門に残されている開催記録の掘り起こしが課題となるであろう。

上述のように、三田演説館において現在でも三田演説会が開催され、その三田演説会の初期の様子が具体的にわかる資料も図書館および福沢研究センターに伝存している。大学として歴史的な建造物を保存・活用しながら、関連する資料群も大切に伝え、その伝統と精神を受け継ぐ演説会も継続的に開催している。これは稀有なことであり、この点にこそ、歴史的な経緯を含めた三田演説会とその関係資料の大きな意義があると思われる。三田メディアセンターにおいては、福沢研究センターと連携しながら、今後も三田演説会に関する貴重な資料を大切に保存し、研究・教育に活用しながら、後世に伝えていきたいと考えている。



## 演説館の保存修理

慶應義塾塾監局管財部 渡辺 浩史

演説館の建設は今から150年前の、明治8年(1875年)。慶應義塾は、明治4年に新銭座(現浜松町)から三田キャンパスに移転したので、三田が開校して間もない4年目に建てられた建物である。新銭座から移転したばかりのキャンパスは、まだ300人程度の学生しかおらず、教室も旧島原藩邸の屋敷を再利用しつつ、新銭座から移築した建物を利用していた。当時のキャンパスは、福沢邸をはじめ、教職員住居、中津藩用住宅、学生用寄宿舎など、居住機能の建物も多く、一見、小さな町のような様相であった。

そんな中、演説館は慶應初の洋風建築(擬洋風建築)である。擬洋風建築といわれているが、外観は、日本の伝統的な、「蔵造り」である。蔵造りの中でも「見世蔵」といわれる店舗・住宅に使われる類で、当時としては珍しい、上げ下げ窓を採用している。土蔵造りは、木造に外壁を漆喰で仕上げられ、防火、防湿、防盜の機能に優れている。演説館の外壁は生子壁(なまこかべ)を採用しており、独特の意匠である。なまこ壁は、外壁に1辺が1尺程度の正方形の「平瓦」をひし形状に貼り付け、その瓦の継ぎ目に、漆喰を蒲鉾状に盛りつけて塗る工法である。通常の土壁の蔵造りより、瓦を敷き詰めるため、高級で、耐火性に優れたものである。

### ■建物概要

演説館は、明治8年竣工(150年経過)、木造、2階建て、建築面積192m<sup>2</sup>、延べ床面積282m<sup>2</sup>、建物の大きさは、桁行(長辺)10間18.95m、妻口(短辺)5間9.43mで、1:2の割合の長方形となっている。現在は1階に144席あり、2階にも席はあるのだが、立入禁止としている。屋根は瓦葺き、外壁はなまこ壁、内壁は漆喰塗り、天井は板張りのうえ和紙貼り、床は板張り、窓(上げ下げ)17か所、出入口3か所、といった内容である。一見左右対称の建物であるが、北面と南面で窓の位置が異なっている。

### ■保存修理、移築と改修

演説館ができて150年の期間に、保存を行うため、次の3つの時期に、大きな改修を施している。

- ① 大正13(1924)年：移築(以下「大正の移築」という)
- ② 昭和22(1947)年：大改修(以下「昭和の大改修」という)
- ③ 平成8(1996)年：大改修(以下「平成の大改修」という)

大正以前の工事については記録が残されていないため、不明だが、戦後においては、上記以外でも補修作業は何

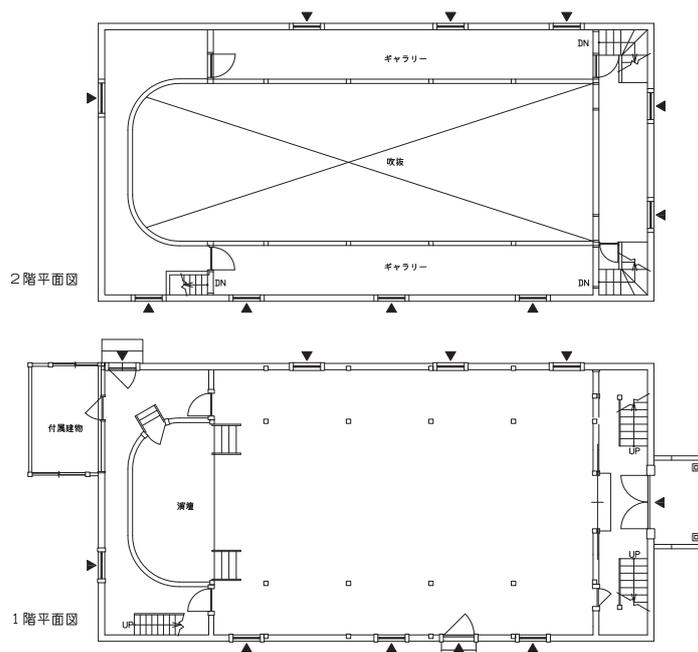


図1 三田演説館1階・2階平面図



図2 三田演説館立面図

度も行われており、例えば昭和33年の台風11号被害の復旧、2011年の東日本大震災被害の復旧といったことも行われている。

ここでは、上記3つの大改修について、どのようなことが行われたか解説したい。

### ① 大正の移築

大正13年、元々演説館は、旧塾監局の北面に位置しており、それを現在の稲荷山に移築した。演説館竣工から49年経過した時期である。大正12年9月1日の関東大震災において、外壁や屋根の瓦が剥落したようだが、火事も起こらず、被害としては、それほど甚大なものではなかった。移築の理由として石碑には「火災の危険を慮り」と書かれている。また、地震被害後の区画整理を行うにあたり、移築させる必要があったものと考えられる。この頃は、木造建築の移築や、建築材料の再利用というのは当たり前のように行われていた時代である。移築のため、一旦、建物は解体され、再構築されている。創建時の材料がどこまで再利用されたかは、記録がないため詳しくはわからないが、主要構造部などの材料は、ほぼ再利用されたものと考えられている。

### ② 昭和の大改修

昭和22年に大改修が行われており、竣工から72年、大正の移築から23年が経過した時期である。昭和20年5月の東京大空襲で、三田キャンパスでも甚大な被害があり、5つの建物を残し、それ以外はすべて破壊された。演説館も横に焼夷弾が落ちたようだが、なんとか被害を免れている。終戦間もない、まだ大学の復興途上のなか、

演説館の大改修が行われている。工事記録は残っていないが、当時の決裁書に添付されている見積書から、どのような工事が施されたか伺い知ることができる。

窓、扉の建具・ガラス類は、この時にすべて取り換えられたようである。木工事において、床、手摺、階段など取り替え、部分補修が施され、防腐剤を塗り、内装は塗装されている、外壁は一部補修が行われ、水洗いし、ほとんどオリジナルのまま残されている。屋根も、「在来屋根瓦葺替補修(支給瓦使用)」と、部分的な補修を行ったようだ。大改修ではあるが、躯体や外壁など、オリジナルの多くの部材が残して改修された。費用は259,435円である。

同年、この改修とともに、建物の横に、演説館の歴史を記した石碑が安置され、慶應義塾創立90周年の式典が挙行された。

### ③ 平成の大改修

平成7年12月から平成9年2月までの15か月に及び大改修が行われた。竣工から121年、昭和の大改修から49年経過した時期である。すでに重要文化財になっていたため、文化財保存の主任技術者の監理のもと大規模な改修が実施された。

主だった工事の内容は、屋根瓦全面撤去葺替269m<sup>2</sup>、瓦取り替え追加3458枚、外壁(なまこ壁)全面撤去張り直し247m<sup>2</sup>、なまこ壁平瓦取り替え追加545枚、付属家部分組み直し一式、天井和紙(壁紙)張替221m<sup>2</sup>、内装漆喰塗り直し420m<sup>2</sup>、内外部木部ペンキ塗り295m<sup>2</sup>、床解体組み直し178m<sup>2</sup>、窓調整補修17か所、基礎石積据え直し、柱腐食部取り換え、といったものである。また、この工事と同時に耐震補強も施された。

工事内容を端的に言うと、壁、床を剥がし、屋根を外し、スケルトンの状態にし、耐震補強を施したうえ、組み直すといった工事である。屋根瓦、外壁瓦は状態が良いものは再利用している。

改修費は151,205,330円で、そのうち補助金は79,489,000円取得した。

#### ④ その他の改修

明治8年の演説館創建時は、電気がない時代で、照明、音響設備がない状況である。主に窓明かりで、肉声で演説を行っていた。

現在では、照明、音響（放送）設備が設置され、防災設備として、火災感知器、屋外消火栓、監視カメラ、また、空調設備も備えられている。これらの機械的設備はできるだけオリジナルの雰囲気を壊さぬようにしつつ、一通りのホール機能が備えられている。

#### ■おわりに

演説館は30年～50年の間に、大規模な改修を施しながら、維持保全を図ってきた。

平成の大改修で、最も重要な工程はなまこ壁の再現であった。当時、なまこ壁のできる左官職人を探し、遠方から来てもらったと聞いている。漆喰の高さ幅を一定にし、方眼状に直線と交差を狂いなく仕上げるのは、見事な職人の技である。近年、こういった技術がどんどん失われていっており、技術の高い職人は非常に貴重な存在となっている。

平成の大改修から約30年が経過しており、そろそろ再度大改修が必要な時期が近付いている。今後も、この文化財の建物を、後世に残していくため、適切に保存を施すことが望まれる。

## 「コロナ禍」におけるウェーランド経済書講述記念講演会

慶應義塾福沢研究センター事務長 高野 泰彦

昭和31（1956）年、慶應義塾は5月15日を「福沢先生ウェーランド経済書講述記念日」と定めた。戊辰戦争さなかの慶應4（1868）年のこの日、上野で官軍と彰義隊の戦闘が行われて砲声が江戸の町に響き渡る中、福沢先生は学問研究を一日もゆるがせにできないとしてウェーランド経済書の講義を続けたというエピソードにちなむものである。毎年この日もしくは前後に三田演説館を主たる会場として「福沢先生ウェーランド経済書講述記念講演会」（以下、ウェーランド講演会）を実施してきた。

2020年初頭、新型コロナウイルス（COVID-19）というパンデミックが世界中に襲いかかってきた。4月に入ると緊急事態宣言が発出され、街中からも通勤電車からも大学キャンパスからも人が消え、授業はすべてオンラインで実施された。従って2020年は「ウェーランド講演会」を休止してしまうことが社会的常識に添う対応であったとも思われる。実際、伝統ある三田演説会は2019年10月から2年間の空白を経て2021年12月に再開されている。しかし「ウェーランド講演会」は時期がず

れたとはいえ、2020年にも開催されたのである。

その後約4年間の“コロナ禍”において、世の中の様々な行事、スポーツなどが感染防止対策のため中止や縮小、多くの制限がかかり、オンライン配信などへの大きな変化が訪れる。しかしその間も、関係者は様々な工夫を凝らし、ウェーランド講演会は着実に回を重ねた。そして2023年連休明けの5月8日にCOVID-19が2類から5類に変更されて、人々の生活が徐々に元に戻っていく節目となり、翌週5月15日実施の2023年の「ウェーランド講演会」は5年振りに三田演説館における対面形式に復して開催された。

「ウェーランド講演会」は昭和31（1956）年の第1回以来、学園紛争のさなかであっても震災の年であっても中止されたことはなく、本年2025年は70年目を迎えた。この行事を継続する努力により「慶應義塾は一日も休業したことはない」（『福翁自伝』）という福沢先生の学問に対する気概を伝える記念日の意義も繋ぐことができたことを喜び、ここにその間の取り組みを記録しておきたい。

2020年	2020/12/2	西校舎ホール ＜会場でのみの講演：後日動画公開＞	池田 幸弘（経済学部長） 「福沢論吉と経済という言説：新旧両理念のはざままで」
2021年	2021/5/15	三田演説館 ＜オンライン講演（事前収録）＞	権丈 善一（商学部教授） 「“この人民ありてこの政治あるなり”の今日的意味合いを語って、10年」
2022年	2022/5/13	北館ホール ＜会場でのみの講演（後日動画公開）＞	鈴木 哲也（理工学部教授） 「慶應義塾における教育研究の産業界への貢献～現代の実学とは？～」
2023年	2023/5/15	三田演説館 ＜会場でのみの講演＞	松沢 裕作（経済学部教授） 「戦争・立身・ジェンダー ― 明治日本の基礎過程」

## 新収資料紹介

令和6年10月から令和7年3月までの間に、福沢研究センターに収蔵された資料の一部を紹介します。すべての資料をご紹介できませんが、この場をお借りして御礼申し上げます。

### ■福沢諭吉書 物外有物無心即無物 1幅

【寄贈】

読み下しは「物外に物あり無心即ち無物」。複数の揮毫が残る。『福沢諭吉の遺風』(時事新報社、昭和29年)p.144にも収録されている。旧蔵者の藤田簡吉は、明治20～24年慶應義塾に在籍し、明治29年特選塾員。義塾を離れるときに福沢から贈られたと思われる。新潟銀行などを経て新潟市会議員も務めた。関防印は「無我他彼此」(陰刻)、落款印「三十一谷人」(陰刻)、「福沢諭吉」(陽刻)。



### ■山口広江宛福沢諭吉書簡 明治18年12月29日付 1面

【購入】

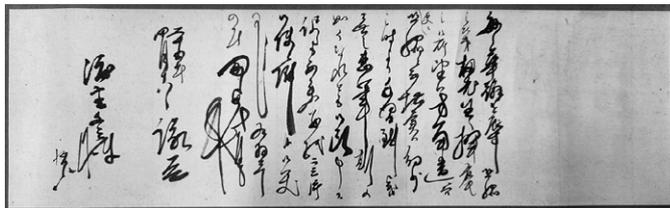
銀行為替で貸金5000円を受領し、担保は島津氏(島津万次郎)に託して返却する旨を伝える書簡。宛先の山口広江は旧中津藩士で、年齢は福沢の10つ上。兄三之助の旧友であったが、維新後は福沢と親交を保った。本書簡は、山口が秩禄公債をもとに第七十八銀行を設立し、頭取を務めていた頃のものであり、そのような立場から相談をしたものと思われる。『福沢諭吉書簡集』第4巻刊行時には校訂ができていなかった。



### ■渡辺文三宛福沢諭吉書簡 明治25年4月18日付 1通

【購入】

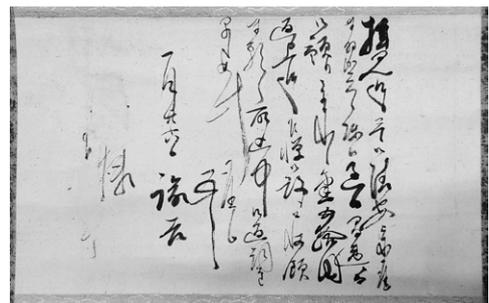
所望の揮毫を贈る旨を伝える書簡。書簡中、福沢は自身の書について、幼少の時より手習いをせず、「悪筆」であるから「御笑まで」と謙遜している。宛先の渡辺文三は未詳だが、『福沢諭吉全集』第18巻では明治14年に入塾した渡辺文三郎かもしれないとしている。『福沢諭吉書簡集』第8巻刊行時には校訂ができていなかった。



### ■福沢諭吉書簡 宛先不詳 年不詳1月26日付 1幅

【購入】

金五十円を返却する旨を伝える書簡。書簡本文および封筒の宛先欄が削り取られており、宛先は不詳。箱には「三男四郎在学慶應義塾理財科 因与之朝夕拜之可追慕先生之高風也 大正七年三月三十日 楽山武岡書識」と書かれている。楽山は実業家・歴史家で、書画や浮世絵の蒐集家でもあった。『福沢諭吉書簡集』第9巻刊行時には校訂ができていなかった。



(酒井俊輔)

## 主な動き

### ■ 福沢研究センター公開講座

福沢研究センター設置講座「近代日本研究Ⅲ」のゲストスピーカーによる講義が行われた。

12月5日(木) Zoom 配信授業

ハサン・カマル・ハルブ氏

(広島大学・ガララ大学ピースメモリアルセンター所長。同大学で日本との国際交流をご担当、カイロ大学の教授)

・『学問のすゝめ』からみるエジプトの近代化

12月12日(木) 対面実施

李セボン氏(成蹊大学法学部教授)

12月26日(木) 対面実施

松岡李奈氏(中津市学芸員・福沢研究センター客員所員)

### ■ 慶應大阪シティキャンパス(KOCC)におけるセンター講座

今年度は「西洋文明の受容と日本の近代」をテーマに以下の5名が講義を担当することになった。今回の講座では、翻訳や教育、法律などさまざまな観点から、近代日本における西洋文明の受容について考えていった。

2024年11月16日(土)

経済学部准教授 ミヤンマルティン、アルベルト  
「文明開化の倫理・道徳教育～ウェーランドの教科書と阿部泰蔵の翻訳～」

2024年12月14日(土)

福沢研究センター非常勤講師 姜兌玟  
「日本政治思想史における「洋学」と福沢諭吉」

2025年1月18日(土)

福沢研究センター調査員 加藤学陽  
「西洋法文化の受容と福沢諭吉」

2025年2月25日(土)

慶應義塾大学名誉教授 太田昭子  
「明治の初等教育と福沢諭吉―世界地理教育を中心に―」

2025年3月15日(土)

福沢研究センター教授 西沢直子  
「小幡篤次郎の翻訳活動と「西洋」の受容」

### ■ 中津市の行事等への参加

新中津市学校の市民講座は、10月5日(土)に、副所長の平野隆君の講演「和田豊治：中津出身の大正財界世話役」が開催された。12月6日(金)の第63回全国高等学校弁論大会の審査員には、所員の小川原正道君が派遣され、審査と講演を行なった。また、2月3日(月)第125回忌法要時記念講演会には常任理事の岩谷十郎君が講演を行なった。



副所長の平野隆君の講演風景



全国高等学校弁論大会での小川原正道君

### ■ 『近代日本研究』第41巻

『近代日本研究』第41巻が2月末に刊行された。

今回の特集テーマは「近代日本の地域社会・業界と慶應義塾」。10名の方から寄稿いただいた。また、査読を通った論説3件、研究ノート1件、資料紹介1件と、新収資料を掲載した。

### ■ 『小幡篤次郎著作集』別巻の刊行予定

今年度6月の刊行予定。この別巻の刊行をもって、慶應義塾および一般社団法人福沢諭吉協会の共同事業による『小幡篤次郎著作集』全巻の刊行が完了となる。

■ 諸会議

- \*2024年度執行委員会(10月3日、11月7日、12月5日、1月14日、2月7、27日)
- \*2024年度福沢研究センター会議(11月5日、1月14日、2月12日、3月4日)
- \*塾史展示館所員会議(11月5日、1月14日、2月12日、3月4日)
- \*2024年度福沢研究センター運営委員会(12月18日)
- \*2024年度塾史展示館運営委員会(12月18日)
- \*『小幡篤次郎著作集』刊行委員会(3月27日)
- \*『近代日本研究』第42巻編集委員会(3月31日)

■ 人事

- <所 長> 退任 平野隆(商学部) ～9月30日  
 新任 西沢直子 10月1日～
- <副 所 長> 退任 西沢直子 ～9月30日  
 新任 平野隆(商学部) 10月1日～
- <運営委員兼所員>  
 退任 池田幸弘(常任理事、経済学部教授)  
 ～3月31日(任期満了)
- <事 務 局> 退任 久我竜二(事務長) ～10月31日  
 新任 高野泰彦(事務長) 11月1日～  
 中川和美(事務員) 11月1日～  
 定年退職 竹屋早月(主務) ～3月31日  
 退職 西村真由(事務嘱託) ～3月31日

■ 主な来往

- \*都倉、APRU 参加者向け図書館・三田演説館英語案内(10月9日)
- \*都倉、大英図書館来客展示館英語案内(10月31日)
- \*都倉、日本ばね学会関係者展示館見学対応(11月28日)
- \*都倉、キャンノン、トータルメディア視察団展示館見学対応(11月28日)
- \*都倉、通信湘南慶友会展示館案内(12月14日)
- \*都倉、ソウル大学視察団展示館見学対応(1月20日)
- \*福沢記念館泉氏、荒木氏来訪(1月22日)
- \*都倉、中津市長来訪対応(1月23日)
- \*都倉、NBC コンサル展示館見学対応(2月7日)
- \*都倉、横山、ソウル大学記録館視察対応(2月12日)

■ 取材対応

- \*都倉、放送大学「福沢論吉の物理学への夢」取材(10月22日対応)
- \*都倉、NHK「知恵泉」取材(10月28日対応)
- \*都倉、毎日新聞取材(企画展関係、10月29日対応)
- \*都倉、共同通信取材(日吉寄宿舎関係、11月28日対応)
- \*都倉、サライ取材(展示館関係、1月17日対応)
- \*都倉、NHK「チョコちゃんに叱られる」取材(12月16日、1月20日対応)
- \*都倉、産経新聞(新収資料展関係、1月15日対応)
- \*都倉、産経新聞(時事新報関係、2月20日対応)
- \*都倉、テレビ朝日(復活早慶戦関係、3月17日対応)

■ 出張・調査

- \*西沢、資料閲覧のため横浜市立中央図書館訪問(10月16日)
- \*都倉、メディアコム研究交流のため韓国延世大学出張、報告(11月16～17日)
- \*都倉、横山、安曇野出張(3月9日)

■ 講師派遣

- \*ミヤン所員、太田客員所員、西沢、加藤、中央区民カレッジ開始(10月3日～11月21日、全5回)
- \*都倉、慶應義塾全国議員連盟講演「福沢論吉・新紙幣・北里柴三郎」(11月8日)
- \*都倉、神奈川通信三田会講演「塾風と一万円札 お札の顔になるということ」(11月9日)
- \*都倉、北里柴三郎記念会15周年記念式典講演「北里柴三郎と福沢論吉 その重なりと違いを考える」(11月23日)
- \*西沢、ダイハツ九州安全衛生協議会(11月28日)
- \*都倉、渋沢栄一記念財団「論語とそろばんセミナー 2024」登壇(12月2日)
- \*小川原所員、第63回全国高等学校弁論大会(12月6日)(審査員)
- \*都倉、SFC 高等部3年三田キャンパス案内(12月9日)
- \*都倉、北里記念博物館講演：新紙幣発行記念「福沢論吉と北里柴三郎一港区で活躍した紙幣の偉人たち」(12月22日)
- \*都倉、港区平和都市宣言40周年事業、港区内史跡巡り講師(1月13日)
- \*都倉、小金井市公民館講座 新紙幣発行記念 紙幣になった偉人達から未来へのメッセージ(第4回)『学問のすゝめ』——福沢論吉の目指した社会を考える(1月31日)
- \*西沢、交詢社午餐会(2月7日)
- \*都倉、大阪三田体育会講演「塾体育会と新スポーツ開拓」(2月8日)
- \*山内所員、都倉、横山、酒井、小久保、横浜初等部7期6年福沢先生の時間、三田キャンパス見学会対応(3月3日)
- \*都倉、学生部主催中津・小国ツアー引率(3月5～7日)
- \*西沢、福沢研究センター講座2024第5回『小幡篤次郎の翻訳活動と「西洋」の受容』(大阪シティキャンパス、3月15日)
- \*西沢、福沢論吉協会土曜セミナー(3月22日)

■ その他

- \*都倉、港区文化財保護審議会(10月11日、3月27日)
- \*都倉、横山、トーク&コンサート「藤山一郎を語り、聴き、歌う」(11月2日)
- \*西沢、すみだ共生社会推進センター(11月6日)
- \*福沢研究センター共催、第11回石橋湛山研究学会(12月14日)
- \*山内所員、都倉、中津福沢旧邸模型御寄贈者田中悠雅氏ほかと面会(1月14日)
- \*加藤、福沢研究センター講座(第3回)(1月18日)
- \*都倉、軽井沢慶應会70回記念冊子座談会(2月5日)
- \*都倉、三田評論4月号特集座談会「時事新報と日本のジャーナリズム」で司会(2月21日)
- \*西沢、平野、新中津市学校運営委員会(3月18日)
- \*西沢、福沢旧邸保存会評議員会(Zoom、3月26日)

福沢研究センター スタッフ一覧

所 長	西沢 直子	福沢研究センター教授	戸村 理	東北大学高度教養教育・学生支援機構 教学共創推進センター
副 所 長	平野 隆	商学部教授	平石 直昭	東京大学名誉教授
専任所員	都倉 武之	福沢研究センター教授	平山 洋	静岡県立大学助教
	松岡 李奈	福沢研究センター助教	藤原 亮一	田園調布学園大学教授・図書館長
所 員	朝倉 浩一	理工学部教授	前坊 洋	
(兼運営委員)	武林 亨	医学部教授	松沢 弘陽	
	山内 慶太	常任理事、看護医療学部教授	松田宏一郎	立教大学教授
所 員	上野 大輔	文学部准教授	三科 仁伸	拓殖大学准教授
	大久保健晴	法学部教授	宮内 環	慶應義塾大学産業研究所兼任所員
	大久保忠宗	普通部教諭	宮村 治雄	
	大塚 彰	志木高等学校教諭	山尾 忠弘	大阪経済大学講師
	小川原正道	法学部教授	山田 央子	
	小山 太輝	幼稚舎教諭	吉岡 拓	明治学院大学教養教育センター准教授
	小山 幸伸	文学部教授	林 宗元	韓国 Catholic 関東大学校名誉教授
	齋藤 秀彦	横浜初等部教諭	Saucier, Marion	
	末木 孝典	高等学校教諭	Nguyễn thị Hạnh Thục	Ho Chi Minh City University of Technology Lecturer
	段 瑞聡	商学部教授	Ballhatchet, Helen	慶應義塾大学名誉教授
	中西 聡	経済学部教授	Knaup, Hans-Joachim	慶應義塾大学名誉教授
	橋口 勝利	経済学部教授	岡部 敏和	中央大学兼任講師
	馬場 国博	横浜初等部長、湘南藤沢中・高教諭	加藤 学陽	
	伏見 岳志	商学部教授	姜 兌玟	
	Millán Martin, Alberto	経済学部准教授	具 知會	
	藪本 将典	法学部准教授	小林 伸成	
	結城 大佑	普通部教諭	重田 麻紀	慶應義塾大学文学部古文書室研究員
顧 問	井奥 成彦	名誉教授	白石 大輝	桐蔭横浜大学専任講師
	岩崎 弘	元幼稚舎教諭	柄越 祥子	
	小室 正紀	名誉教授	巫 碧秀	Silk Road Cities Alliance Secretary General
	坂井 達朗	名誉教授	堀 和孝	関東学院大学非常勤講師
	松崎 欣一	名誉教諭	山根 秋乃	
	米山 光儀	名誉教授	横山 寛	福沢諭吉記念慶應義塾史展示館専門員
客員所員	安西 敏三	甲南大学名誉教授	高野 泰彦	事務長
	飯田 泰三	法政大学名誉教授・島根県立大学名誉教授	飯島 典子	事務員
	石井寿美世	大東文化大学教授	中川 和美	事務員
	石田 幸生	亜細亜大学准教授	奥山 美樹	事務嘱託
	區 建英	新潟国際情報大学教授	渋沢 彩佳	事務嘱託
	太田 昭子	慶應義塾大学名誉教授	杉本有香里	事務嘱託
	大庭 祐介	二松學舎大学専任講師	董 瀟瀟	事務嘱託
	加藤 三明	慶應義塾名誉教諭	加藤 学陽	非常勤嘱託
	金沢 裕之	防衛大学校教授	長谷川 陵	非常勤嘱託 (50音順)
	我部 政男	山梨学院大学名誉教授		
	川崎 勝			
	金 文京	新村出記念財団業務執行理事		
	佐藤 正幸	山梨大学名誉教授		
	白井 堯子	千葉県立衛生短期大学名誉教授		
	曾野 洋	四天王寺大学教授		
	高木 不二	大妻女子大学短期大学部名誉教授		
			研究嘱託	
			事務局	
				他に、『慶應義塾150年史資料集』調査員、11名 (4月1日現在)

慶應義塾福沢研究センター通信 第42号

Newsletter of  
Fukuzawa Memorial Center for  
Modern Japanese Studies,  
Keio University

発行日 2025年4月30日 (年2回刊)

編 集 慶應義塾福沢研究センター  
発 行

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45

電 話 03-5427-1604

<http://www.fmc.keio.ac.jp/>

印 刷 (有)梅沢印刷所